

日本環境教育学会「原発事故後の福島を考える」プロジェクト 第3次調査

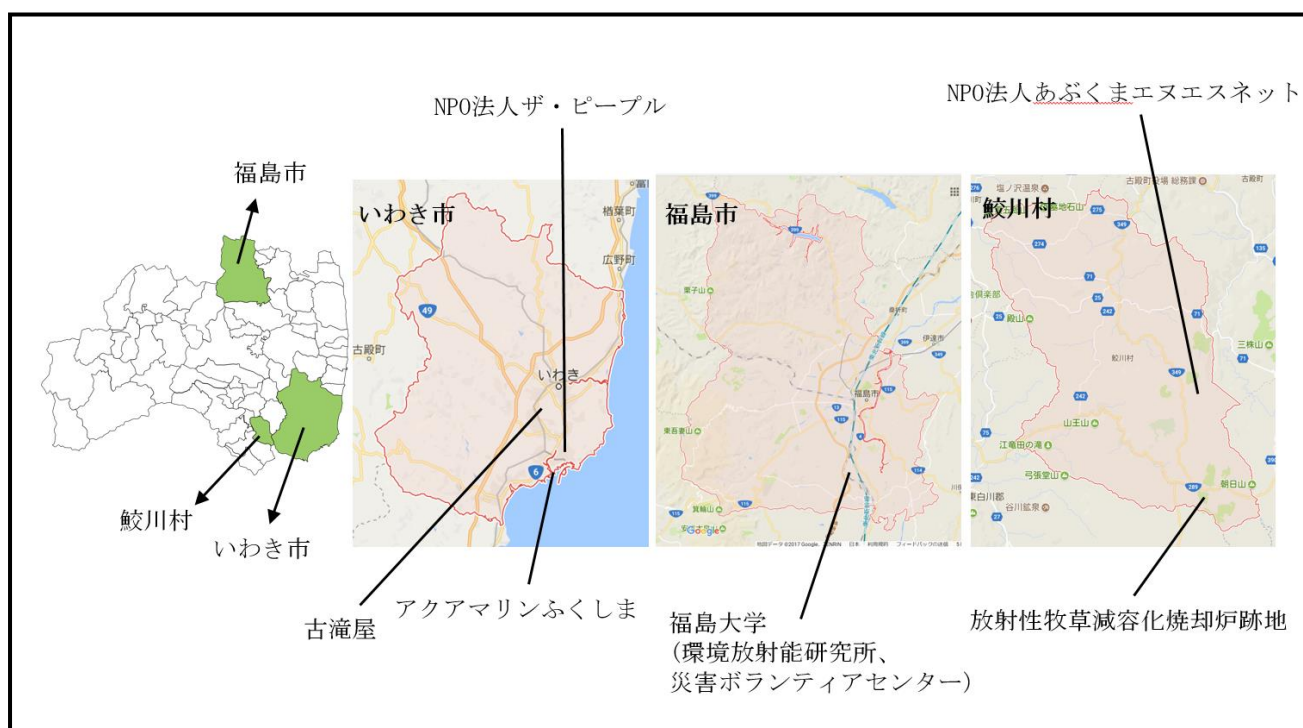
報告書

- 1) 日 時：2017年6月23日（金）～25日（日）
- 2) 場 所：福島県いわき市常磐湯本町, 小名浜辰巳町、福島県福島市金谷川(福島大学)、福島県東白川郡鮫川村
- 3) 参加者：16名

4) 概 要

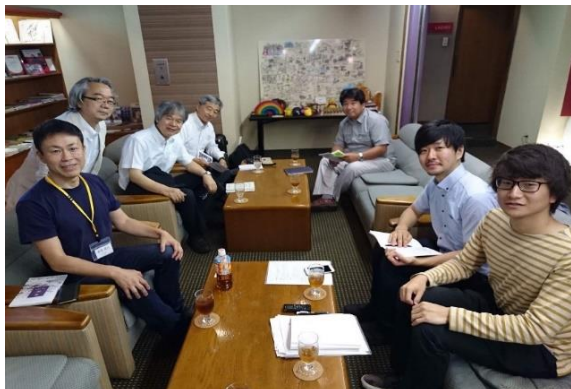
本調査は、毎年2回の頻度で最低5年間継続するとして福島訪問調査の第3次調査であり、3日間の日程で行った。1日目は、いわき市いわき湯本温泉の老舗旅館である元禄彩雅宿古滝屋のご主人にお話を伺った後、福島大学にて、環境放射能研究所と福島大学災害ボランティアセンターの学生を訪問した。2日目は、再びいわき市に戻り、アクアマリンふくしまにおいて聞き取りを行った後、東白川郡鮫川村のあぶくまエヌエスネットにて体験学習や意見交換を行った。3日目は、同じく鮫川村にある放射性牧草減容化焼却炉跡地を訪れ、最後に、小名浜ボランティアセンターにてNPO法人ザ・ピープルの理事長にお話を頂いた。

5) 訪問地 MAP



6月23日（金）1日目

9:30～11:00 元禄彩雅宿古滝屋（福島県いわき市常磐湯本町三函 208）



里見さんを囲んで



建物外観

里見喜生さん（古滝屋ご主人）に、いわき湯本温泉の歴史や震災後の状況、ご自身の取り組みについてお話しいただいた。いわき湯本温泉は、かつては炭鉱が栄え、炭鉱閉山後はハワイアンズバブルや常磐道バブルに伴って成長してきたとのこと。震災による原発事故で状況は一変し、その影響はあまりにも大きかったという。古滝屋は、震災直後においては高校の宿舎として部屋を提供し、原発作業員や除染作業員、インフラ作業員の受け入れはしなかったそうだ。今では、作業員の数は減り、それに頼っていた他の旅館では空室が目立っていると伺った。

里見さん個人としては、旅館業だけでなく、原子力災害に関するスタディーツアーガイドやNPO等、精力的に活動されている。様々な立場の人と交流することで、考え方が偏らないように心掛けているそうだ。そのような活動の原動力となっているのは、父親の死と震災に共通して存在した、一瞬にしてあらゆるものを失うという「はかなさ」だという。今後も心配が尽きないとしながらも、個人としては、50年先100年先もぶれることはない、既に未来を見据えている様子であった。

15:00～16:30 福島大学環境放射能研究所（福島県福島市金谷川1番地）



難波教授のお話

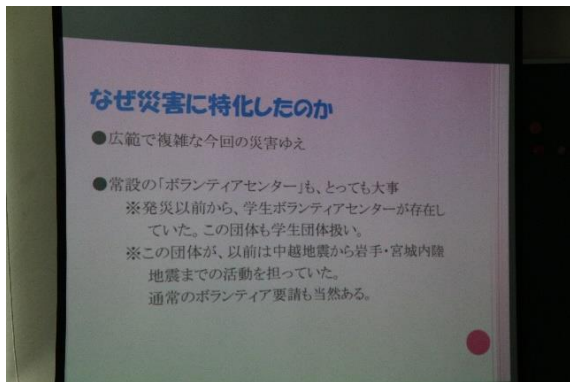


聞き取りの様子

難波謙二所長から福島大学の震災当時の様子、環境放射能研究所についてお話しいただいた。環境放射能研究所は、『温帯多雨地域の環境放射能の動態と長期にわたる影響を科学的に解明するため、国内外の大学や研究機関等との互いの強みを生かした緊密な連携と協力に基づく共同運営を行い、広

く世界に開かれ、その英知を結集する環境放射能調査研究拠点を形成する。』ことを目的に、筑波大学、東京海洋大学、広島大学、長崎大学、放射線医学総合研究所、福島県立医科大学との連携のもと」(パンフレットより)、2013年7月1日に福島大学内に設置された研究所である。中心となっている福島大学の理工学類ではその有志教員により事故直後に放射性プルームの測定をし、圏内の汚染状況に関するマップを作成した。県内では環境創造センターや県立医大の研究所があるがそれとの住み分けをしているという。研究所のデータについては小出しで出しており、関連する論文は原子力機構でデータベース化している。また、研究所には2011年に採取した試料がありそれを今後分析手法の進化に合わせて再分析することも考えているという。

16:30～17:30 福島大学災害ボランティアセンター (福島県福島市金谷川1番地)



活動紹介



集合写真

福島大学災害ボランティアセンター所属学生に、活動内容やその背景について伺った。まず、初めに、PPTにて活動内容をご紹介いただいた。特筆すべきは、活動資金は、学生自らが補助金を獲得して捻出するとのことだった。次に、所属学生と、本団体の取り組みから学生生活のことまで、幅広く意見交換を行った。子どもキャンプや仮設住宅への訪問を始めとして多くの事業を行っているが、そのやりがいや苦勞など、学生の思いは様々だった。今後は、他大学とのより密な連携を図るなどして、現在の活動を維持していきたいという。

6月24日(土) 2日目

10:45～12:00 アクアマリンふくしま (福島県いわき市小名浜辰巳町50)



水口さんのお話



星さんのお話

目黒さん（副館長）、水口さん（営業担当）、星さん（命の教育チーム）から震災被害の様子、復興までの道のりについてお話いただいた。アクアマリンふくしまは、ふくしま海洋科学館の愛称として親しまれる環境水族館である。アクアマリンふくしまの被害は、大地震、津波、原発事故の3つにある。電気の供給が断たれる過装置が停止したため750種20万点の9割を失った。その後様々な人の支援を受けてその年の7月15日には再オープンした。どこよりも早くに復旧ができたのはたくさんの支援はもちろんのこと、館長のリーダーシップと組織内でチームワークをうまく取れたことが大きいという。

次に星さんからは主に震災当時の学校の様子、アクアマリンふくしまでの教育実践についてお話をいただいた。震災当時、いわき市の小学校で働き2年生20名の児童の担任であった。地震発生時、ちょうど下校時刻で児童とともに外にいた星さんは、校庭の土が波より押し寄せる凄まじい様子を振り返る。放射線等への対応に追われる中、児童の県外避難、外遊びの制限による体力低下の問題についての関心を述べられた。現在は、県教委からアクアマリンふくしまに派遣され、アクティブラーニングでの防災教育等を小中学生に実施している。

14:00～ NPO 法人あぶくまエヌエスネット（福島県東白川郡鮫川村赤坂東野葉貫 57）



視察の様子



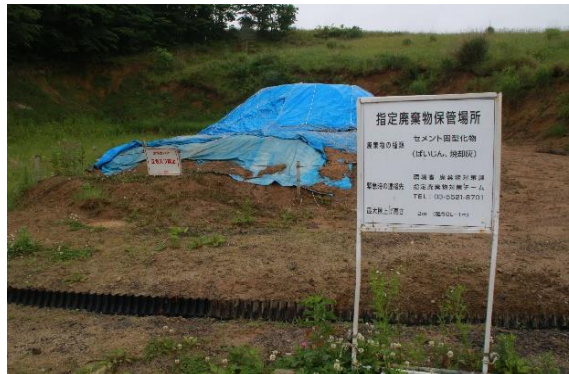
進士徹氏

NPO 法人あぶくまエヌエスネットにて、進士徹さん（代表）、伊勢野大吾さん、伊藤千陽さん（スタッフ）に活動フィールドの案内をしていただき、その後、地元の温泉や、奥様の進士由美子さん、ジョシュさんも含めて料理を楽しんだのち、3名の方からお話をいただいた。はじめにネイチャーゲームのファシリテーターをされており、当時、富岡町の消防団員として活動されていた宍戸さんから、帰宅困難地域の被害の様子をお話し頂いた。人が去った「夜の森駅」の駅前を歩くノウサギや、大熊町から逃げてきたというダチョウやイノシシなどの動物が街を歩き回る写真などを見せて頂いた。続いて、鮫川村で子育てをする蛭田かずよさんから、環境省の「高濃度放射性廃棄物焼却施設」建設計画に対する活動についてのお話を伺った。「ここで暮らすことを決めたからには出来ることをやり、前に進む」と現在の思いを述べられた。そして、代表の進士徹さんから、2011年から5年に渡って行われた「ふくしまキッズ」の活動をご紹介頂いた。初めは「福島の子どもたちを守ろう」というテーマのもと、福島からの「避難」の意味合いが主であったが、徐々に将来の「復興・福島」を担う人材育成としての「教育的な要素も高まったといい、総計4700人もの子供たちが、県外の長期滞在を経験した。代表の進士さんは活動を振り返り、「人の繋がり」の重要性について述べられていた。

9:30～10:00 放射性牧草減容化焼却炉跡地（福島県東白川郡鮫川村青生野地区）



焼却炉跡地



指定廃棄物保管場所

進士徹さんから、当焼却炉が出来た経緯やそれが廃止になった理由についてお話しいただいた。焼却炉は、住民への十分な説明が無いまま村議会で承認され、2012年11月に建設が開始された。それを受けて住民側は、勉強会などを経て、反対活動を粘り強く行った。その後、解体が決定され、最終的に2016年11月に解体が完了した。施設は撤去されたものの、残された廃棄物をどう処理するのかと、周辺住民は苦言を呈している。

11:00～12:30 NPO 法人ザ・ピープル（福島県いわき市小名浜蛭川南5-6）



吉田さんのお話



聞き取りの様子

今回のツアーを締めくくる場として、NPO 法人ザ・ピープル理事長吉田恵美子さんに本法人およびふくしまオーガニックコットンプロジェクトの活動内容についてお話しいただいた。

NPO 法人ザ・ピープルは、1990年の設立当初より古着のリサイクル活動を行っており、回収品の90%以上を再資源化しているとのこと。震災後は小名浜地区の災害ボランティアセンターを立上げ、がれきの片付けや食事の提供などのサポートをされた。その後、自然災害と原発事故という立場の異なる被災者が共生することの難しさなどの問題が複雑化する中で、誰もが利用できる心のよりどころとしてのサロンを商業施設内の一角に設置された。

同時期に東北コットンプロジェクトが塩害に強いという理由でコットンの栽培を始めたことを受け、農業を諦めかけていた人を巻き込み2012年より栽培を開始した。福島からのメッセージを発信

するため、茶綿にこだわっている。最近では小学校でコットン栽培が取り入れられており、産業教育・環境教育・震災教育の役割も果たしているとのこと。

コットンの畑での農作業が人の交流において大きく機能できると考えつくられた「みんなの畑」では、避難者にとって、土に触れ、大声で話し笑い、時には愚痴もこぼせる場となっているようだ。最近では拠点も増え、農家民宿にまでコットン栽培が広がっていると言う。

連絡・問い合わせ先：irunga1205@yahoo.co.jp（東京農工大学大学院修士1年、小松淳一）